

追悼抄



次回は16日掲載予定です

仏文学者

「クイズは知識の詰め込み。勉強と違うから、間違っても笑っていいじゃないですか」

TBS系のクイズ番組「クイズダービー」の名物解答者だった学習院大名誉教授の自宅を訪ねたのは2005年5月だった。番組のイメージ通り、明らかにテレビの思い出や仏文学への思いを語った。

「愉快。愉快」。1977年から11年間出演したクイズダービーでは、司会の大橋巨泉さんとのとぼけたやり取りが忘れられない。番組は5人の解答者を競走馬に見立て、出題された問題を誰が当てるか参加者が持ち点をかける。

抜群の解答率で「宇宙人」とも呼ばれた漫画家のほらたいらさんや、三択問題に強く「三択の女王」と称された女優の竹下景子さんの傍らで、大学教授なのに珍回答を連発。正解が多いと「上品」、少ないと「上品」と言った。

番組の現場で働いたTBSテレビの小笠原知宏宣伝部長

篠沢 秀夫 さん

(10月26日、筋萎縮性側索硬化症で死去、84歳)

生涯、明るく愉快な「教授」

(52は、「決して問題が漏れないよう、最終問題を2問作るほどスタツフは緊張した。その中でも篠沢さんは、全盛期の巨泉さんやゲストに気さくに話していた」と語る。

明るさの中に、強い芯があった。戦中だった子供時代、夢は少年飛行兵になることだった。だが戦後、周囲が英語一色となり、急な変化に反発。フランス文化の奥深さを知り、「日本再興のためフランス語を学び、ヨーロッパ精神の根本を知ろう」と決めた。

中学3年からフランス語の専門学校に通い、学習院大から東大大学院に進み、パリ留学。研究の道を順調に歩み始めていた1962年、フランスで自らが運転する車の事故で、最初の妻を亡くした。

帰国後、学習院大の研究室で副手を務めた礼子さん(77)

と再婚し、子供に恵まれた。だが75年、今度は中学生になった先妻の息子が、学校の合宿中に海で溺死した。悲しみについては語らないことで耐えるしかない。当時の心境を自著に記している。

晩年は全身の筋肉を動かす神経が麻痺する難病、筋萎縮性側索硬化症(ALS)を患い、8年の闘病生活を続けた。車いす生活となり、人工呼吸器をつけ、声を失った。だがパソコンで執筆を続け、難解なモーリス・ブランショの小説「謎のトマ」を翻訳した。

礼子さんは「診断当初、絶望的な気持ちになりました。でもパパはつらいとも言わず、ニコニコとして神様のようでした」と振り返る。

車いすで散策し、「景子の木」など、かつての共演者や知人の名前を自分でつけた街の木を見ることを楽しんだ。苦しさは胸の底に沈め、明るく愉快な「教授」であり続けた。(文化部 待田晋哉)



「クイズダービー」では「1枠」が指定席。太い縁のメガネがトレードマークだった篠沢さん(1988年) ©TBS